

# 静態動詞「似る」の一形式

—『源氏物語』の用例を中心に—

森脇茂秀

## 一、はじめに

以前、稿者は、森脇（二〇〇四）で、平安初・中期の仮名文学作品に用いられた「似る」の用例を考察した結果、次のような結論を得た。

「似る」は、否定語と共に用いられる用法が多数であり、この点では、「ゴトシ」というよりも、漢文訓読語「シク」（「シカズ」等）に近似の性質を有する、と考えられるのではないかと思われる。

また、「に似たり」形は、「漢文訓読語」である、との指摘があるが、「に」と「似たり」との間に、「ぞ」「こそ」等の係助詞が介在したり、「いとよく」等の修飾語が介在しており、漢文訓読にみられた「形式用言」としての

「に似たり」形ではなく、仮名文に用いられた「に似たり」形は、状態性を有した「実質動詞」である、と考えられる。

森脇（二〇〇四）では、『源氏物語』中の「似る」の用例については、詳述せず、また現代語の「似る」の用法については、「ている」「た」といった、下接する所謂「助動詞」が限られているが、そのような「似る」の「承接」についても、言及が不十分であった。

そこで、本稿においては、『源氏物語』中に表れた「似る」の意味用法を考察し、平安時代における静態動詞「似る」の意味用法の一形式について、考察してみよう、と思う。（尚『源氏物語』の本文は、小学館『日本古典文学全集』に依った。以下『全集』と記す。）

## 二、「似る」肯定形と「り・たり」

### 二一、「似る」の用法

静態動詞「似る」の全体の用例数の分布については、森脇(二〇〇四)で示した。現代語「似る」の用法については、大きく分類すると、「ている」と共起するか、「似た」となるかであったが<sup>(注1)</sup>、古代語「似る」についても、大きく二つに分類できる。一つは、「ている」に相当する「り・たり」と共起する用法(「り・たり」共起用法)であり、もう一つは、「否定辞」と共起する用法(「否定辞共起用法」)である。

ここでは、まず、所謂助動詞「り・たり」と共起する、「り・たり」共起用法を考察しようと思う。

### 二一、「似る」「り・たり」共起用法

#### (「に似たり」肯定形)

「似る」と「り・たり」とが共起するものは、『源氏物語』中の「似る」133例中、42例で、全体の約32%である。

その中で、「似る」と「たり」とが直接承接する(「似る+たり」)は、25例(全体の19%) (内「似る+たり…:否定辞(「なし」)」4例)、「似る」と「たり」とが直接承接しない用法(「似る…:り・たり」)は、17例(全体の13%) (内「似る…:り・たり…:否定辞(「ず」)」3例)である。『源氏物語』中、和歌に表れた「似る」は、2例で、共に「Aに似たるB〔名詞〕」形である。

〔用例1〕(源氏) 露けさのむかしに似たる旅ごろも田蓑(たみの) の島の名にはかくれず

(二) 濔標297頁

〔用例2〕(尼君) 身をかへてひとりかへれる山ざとに聞きしににたる松風ぞふく

(二) 松風398頁

〔用例1〕は、「Aに似たるB」のAは、「むかし」であり、〔用例2〕は、『全集』頭注に「聞きしににたる松風」は、明石の浦で聞いたのと似た松風、の意に、明石の君の琴の音の意を込める。」とあるように、過去の助動詞「き」

があり、「用例1」との共通性が認められる。

〔用例3〕(略) (夕霧) 「人の上にては、もどかしきわざなりけり」と、つれなく答へてぞものしたまひける。昔の父大臣たちの、御仲らひに似たり。

(三三) 螢210頁

〔用例4〕春秋のあらそひに、昔より秋に心寄する人は数まさりけるを、名だたる春の御前の花園に心寄せし人々、またひき返し移ろふ気色、世のありさまに似たり。

(三三) 野分255頁

〔用例3〕〔用例4〕は、「に似たり。」と終止形の用法で、「用例3」は、「夕霧と柏木との間柄は、昔の源氏と頭中将との御間柄に似ている」と解釈できるが、前述部に「昔」がある点は、「Aに似たるB〔名詞〕」形と共通している。「用例4」は、「気色」が「世のありさま」に似たり」なのであるが、前述部にやはり「昔」がある点で共通性がある。

〔用例5〕尼君の答へうちする声けはひ、宮の御方にもいとよく似たりと聞こゆ。

(五) 宿木480頁

〔用例6〕(略) (女五の宮) 「(略) 時々見たてまつるごに、ゆゆしくおぼえはべりてなむ。『内裏の上なむ、いとよく似たてまつらせたまへる』と、人々聞こゆるを、さりともし劣りたまへらむとこそ、推しはかりはべれ」と、ながながと聞こえたまへば、ことにかくさし向ひて人のほめぬわざかなと、をかしく思す。

(二二) 朝顔461頁

〔用例5〕は、引用節中の「似たり」の用例で、「尼君に答えている声や気配が、宮の御方にもほんとうによく似ているように感じられる」と解釈される場面である。ここでは、これまでのように「昔」といった過去を示す語句はない。また、「Aに」と「似た」との間に挿入されるのは「よく」ぐらいで」という現代語「似る」の用法と同じく、「に」と「似たり」との間に「いとよく」が介在する。

「用例6」は、会話文中に引用された場面に表れた「似る・・・り」の用例で、「今の帝がじつによくあなた様に似ていらっしゃる、と人々がお噂申し上げている」と解釈できる場面である。ここでは「用例5」同様、修飾語句が「いとよく」と現代語の「似る」の用法と共通するものであるが、このように動詞「似る」は、謙讓語や尊敬語を下接する場合でも、係助詞「なむ」の結びとして「り」が出現していることを指摘しておきたい、と思う。

### 二一三、「似て・・・」肯定形と「り・たり」

また、「似て」という形で出現するものは、『源氏物語』中、4例（全体の約3%）存し、それ以前の作品には、見られない形式である。

「用例7」常に書きかはしたまへば、わか御手にいとよく似て、今すこしなまめかしう、女しきところ書き添へたまへり。何ごとにつけても、けしうはあらず生ほし立てたりかし、と思ほす。

(二) 賢木 110頁

「用例8」こまかににほへるところはなくて、父宮に似たてまつりて、なまめいたる容貌したまへるを、もてやつしたまへれば、いづこの華やかなるけはひかはあらむ。

(三) 真木柱 352頁

「用例9」御容貌も、院にいとよう似たてまつりたまひて、いますこしなまめかしき気添ひて、なつかしうなごやかにぞおはします。

(二) 賢木 115頁

「用例10」出でたまひぬれば人々すこし散れぬるに、侍従寄りて、(小侍従)「昨日の物はいかがせさせたまひてし。今朝、院の御覧じつる文の色こそ似てはべりつれ」と聞こゆれば、あさましと思して、涙のただ出で来に出で来れば、いとほしきものから、言ふかひなの御さまや、と見たてまつる。

(四) 若菜下 241頁

「用例7」は「似て」、「用例8」は、謙讓語が介在するが、「似・・・て」と捉えると、「用例7」と同質の用例となる。

また、共に「似て」の修飾部に「り」があり、「似て……り」と捉えると、これまでの「似る」の「り・たり」共起用法のバリエーションとして捉えることができるように思われる。

ところが、「用例9」は、「用例8」同様、「似……て」形であるが、「似る」の修飾部に助動詞「り・たり」が出現せず、性質を異にする。ここでは、「お顔立ちも故桐壺院に大変よく似通いなさつて」と解釈でき、「似る」の対象が「故桐壺院」と過去（の人物）である点や、「似る」を修飾する語句は「いとよう」であること等、これまでの「り・たり」共起用法と共通する点も存している。

また、「用例10」は、「似て」と共起する助動詞が「つ」で、「似て……つ」形となっており、これまでの「り・たり」とは大きく異なる用例である。「昨日のあれはどうなさいましたか。今朝、殿の御覧になつていたお手紙の色がよく似ておりましたが」と申し上げると」と解釈できる用例であるが、ここでは前述部に「昨日」とあるが、その対比として「今朝」があり、これまでの用法と同等の用法として捉えてよいか、疑問は残るが<sup>(注2)</sup>、ここでは、

「こそ」の結びとして「つれ」とあり、「似てはべり(あり)」と考えるよりも、存在「はべり」が補助動詞化しておらず、「似て」「はべり」と本動詞として捉えるべきではないかと考えられる。

### 三、「似る」否定共起用法

古代語「似る」の用法で、否定語と共起する用法が多い、という指摘は、森脇(二〇〇四)でも示したが、「似る」の承接に関しては、助動詞「り」「たり」との関係から、近藤明(一九八四)に、既に重要な指摘がある。近藤明(二九八四)では、「ている」形で実現する、所謂金田一春彦「第四種の動詞」的動詞の用法を精査し、その中で「似る」を取り上げている、スケールの大きな論攷である。

右の条件に該当する「合ふ」以下(「似る」を含めた(稿者注)十二の動詞は、かなり高い比率で「り」「たり」を伴うが、更に表七に示した「動詞+否定辞」「動詞……否定辞」「中止・接続法」を加えたものは、それぞれ

れの動詞の用例の八〇九割前後からそれ以上に達している。(略)

〔動詞＋否定辞〕

⑬ かやうの物さへも、なべての人にも似させ給はぬや(狭衣 巻一 一〇五⑬)

の如く、「り」「たり」を介さずに直接、または他の助動詞・補助動詞を介して否定辞を下接するものである。⑬の例の動詞「似る」は、現代語では、

(略)「B二似る」の使用例はそう多くない。(森田良行『基礎日本語』角川書店昭52)

という指摘が、否定辞を伴う場合にも当てはまるものと思われる。即ち、「この子は私なんかに似ないほうがいい。」の如く、静的な状態の否定ではなく、状態の变化の否定を表す場合を除くと、「似ていない」「似ていらつしやらない」等、「ている」を介して否定辞を下接する形が一般的である。「似る」において、現代語の「ている」に相当するものが古代語では「り」「たり」であろうことは、表七から伺える。「似る」と「り」「たり」との緊密な関係からも明らかである。しかし、「似る」に直接、

又は他の助動詞・補助動詞を介して「り」「たり」が接続したもの(以下「似る＋り・たり」)に更に否定辞が下接した例は、表七では皆無である。「似たらず」や「似給へらず」等は見られない訳である。言わば、「似る」においては、「動詞＋り・たり＋否定辞」の出現が予想される場合では、実際には、「似る＋否定辞」が使用されていることになる。(傍線稿者)

この他に、否定辞を下接する際、「動詞＋り・たり＋否定辞」の形を全く用いず、専ら「動詞＋否定辞」が使用される動詞としては、(略)「あふ」「向ふ」がある。これらの動詞も、「似る」同様「り」「たり」を伴うことが多く、しかもこれらの動詞が「動詞＋否定辞」に用いられた例の多くは、現代語訳する際には「動詞＋ていない」の形をとることが可能と思われるものである。即ち、これらの動詞においても、「動詞＋り・たり＋否定辞」が予想される場合で、実際には専ら「動詞＋否定辞」が使用されている訳である。

このように「似る」の大きな特徴の一つに、「似る」は、

「動詞＋否定辞」（直接承接）や「動詞……否定辞」のように「否定辞」と共起する用法が非常に多いという点がある。これは現代語「似る」の意味用法とは、大きく異なる用法であり、ここでは、近藤明（一九八四）に従い、否定辞と直接承接する用法を「似る＋否定辞」、直接承接せず、否定辞が後に下接する用法を「似る……否定辞」と表記し、両者を併せて「似る」の「否定辞共起用法」と呼ぶことにする。

そうすると、この「否定辞共起用法」は「源氏物語」「似る」全133例中、90例で、全体の約67%を占め、多く用いられた用法であることを指摘できる。その中で、（1）「似る＋否定辞」（「似る」と「否定辞」とが直接承接する用法）は、51例（全体の38%）、（2）「似る……否定辞」（「似る」と「否定辞」とが直接承接しない用法）は、39例（全体の29%）となっている。また、その中で「似る（連体形）＋名詞＋否定辞」は18例で、（全体の14%）、「似る＋べし＋否定辞」が、5例である。

また、意味的には、「否定」と共通性が高いと思われる「反語」（「似る＋べし＋反語（「やは」）2例を否定辞

共起用法中に含めて考えることも可能ではないかと考えられる。

### 三―一、「に似たり」形と否定

「似る」の中で、二―二で取り上げた「に似たり」形は、近藤明（一九八四）指摘の如く、「似たらず」や「似給へらず」等は見られず、直接否定辞と承接する用法はない。その中で、次のような用例がある。

〔用例11〕右大将の、さばかり重りかによしめくも、今日の装ひいとなまめきて、やなぐひなど負ひて仕うまつりたまへり。色黒く鬚（ひげ）がちに見えて、いと心づきなし。いかでかは女のつくろひたてたる顔の色あひには似たらむ。

（三） 行幸284頁

〔用例11〕は、玉鬢の感想に対する語り手の評で、「どうして男が女の化粧を凝らした顔の色つやに似るわけがあ

ろうか」と解釈できる場面である。ここでは、「似たり」に否定辞は直接表れないが、「いかでかは」とあることから分かるように、意味からも「反語」であり、「否定辞」用法との共通性が指摘できるように思われる。

〔用例12〕いとやむごとなきものの姫君のみ多く参り集ひたる宮、と人も言ふを、やうやう目とどめて見れど、なほ見たてまつりし人に似たるはなかりけり、と思ひありく。

(六) 蜻蛉252頁

〔用例13〕ただ、侍従、こもきとて、尼君のわが人にしたる二人をのみぞ、この御方に言ひわきたる、みめも心ざまも、昔見し都鳥に似たることなし。

(六) 手習292頁

〔用例12〕は、心話文の用例で、「やはりお仕え申し上げていたお方に似ている人はいないものだ」と解釈できる用例である。ここでは、「似たらざる」等と「に似たり」と否定辞は直接承接してはいないが、「に似たり」形を

否定していると考えられる。

〔用例13〕は、「伊勢物語」九段による場面で、「昔知つていた都人に似ているところはない」と解釈できるが、ここでも、「似たらざる」形など、直接「に似たり」と否定辞は承接せず、「昔・・・し・・・に似たる〔名詞〕否定(なし)」形となっており、ここでも「用例12」同様「似たる〔名詞〕」を「なし」で否定していると考えられる。

〔用例14〕はつかにのぞく女房なども、「闇はあやなく心もとなきほどなれど、香(か)にこそげに似たるものなかりけれ」と、めであへり。大臣もいとめでたしと見たまふ。

(五) 匂宮28頁

〔用例15〕並びたまへりしをりは、とりどりにて、さらに似たまへりとも見えざりしを、うち忘れては、ふとそれかとおぼゆるまで通ひたまへるを、(略)

(五) 早蕨337頁



「用例14」は、『全集』頭注に「降る雪に色はまがひぬ梅の花香にこそ似たるものなかりけれ（拾遺・春 躬恒）」と指摘があるように「拾遺集」が関連している場面であり、「この薫りには、なるほどほかに似るものもございませんでした、とほめあつている」と解釈できる。ここでは、係り結びに着目し、係助詞「こそ」の結び「けれ」までを一括して捉えようと、これまでのように「似たる〔名詞〕」を「なし」で否定している形であると考えられる。また、ここでは「Aに」と「似る」との間に係助詞「こそ」が介在する用法は、これまでの「にぞ」「には」「にも」と同質の用法であり、「げに」は「いと（よう）」と共通性があると考えられる。

「用例15」は、「似たまへり」を「とも」が承け、一見すると、後接する「見えざり」と分析的に捉えてしまうが、副詞「さらに」の修飾関係からすると、「さらに似たまへりとも見えざりし」までを一括して捉え、「に似る……否定」形と捉えられるであろう。この他『源氏物語』中には、また「声なども、わざと似給へりともおぼえざりしかど」（五）宿木383頁）があり、「似る……りとも」〔動詞〕

否定辞」形の動詞は、「見ゆ」「おぼゆ」である。

### 三―二―一、「似る」否定辞共起用法（「似る＋否定辞」）

まず、「り」「たり」と共起せず、否定辞と直接承接する用法（「似る＋否定辞」）について用例を挙げる。

「用例16」かかることを聞きたまふにも、朝顔の姫君は、いかで人に似じ、と深う思せば、はかなきさまなりし御返りなどもをさをさなし。

（二）葵13頁

「用例17」かかれど、人の見及ばぬ蓬萊の山、荒海の怒れる魚のすがた、唐国のはげしき獣の形、目に見えぬ鬼の顔などのおどろおどろしく作りたる物は、心にまかせてひときは目驚かして、実（じち）には似ざらめど、さてありぬべし。

（二）帚木146頁

「用例18」（末摘花）「いとうれしきことなれど、世に似ぬさまにて、何かは。かうながらこそ朽ちも亡せめとな

む思ひはべる」とのみのたまへば、(略)

(二) 蓬生330頁

〔用例19〕尼君久しくためらひて、「(略)世に経し時だに、人に似ぬ心ばへにより世をもてひがむるやうなりしを、(略)」と言ひつづけて、いとあはれにうちひそみたまふ。

(四) 若菜上112頁

〔用例20〕(略)けしきばかりにて紛らはすを御覧じとがめて、持たせながらたびたび強ひたまへば、はしたなくもてわづらふさま、なべての人に似ずをかし。

(四) 若菜下271頁

〔用例21〕(女房)「かの大殿は、よろづの事なつかしうなまめき、あてに愛敬づきたまへることの並びなきなり。これは男々しうはなやかに、あなきよら、とふと見えたまふにほひぞ、人に似ぬや」とうちささめきて、「同じうは、かやうにても出で入りたまはましかば」など、人々言ふめり。

(四) 柏木329頁

〔用例22〕(略) (中の君)「昔も、人に似ぬありさまにて、かやうなるをりはありしかど、おのづからいとよくおこ

たるものを」とのたまへば、(略)

(五) 宿木397頁

〔用例16〕の「似る」の否定辞は、「じ」であり、「源氏物語」中、「じ」は、この用例のみである。ここでは、「朝顔の姫君は、自分だけは何としてもその二の舞はすまい、と強く警戒していらつしやるので」と解釈できるが、「その」とは、「A、Bに似る」のB、即ち「世間の女性」のこと、具体的には、六条御息所を指す。

〔用例17〕は、「想像で大仰に作った絵は、実物には似ても似つかぬものでしょうが」と解釈できるが、Bは「実(実物)」であり、具体的な事象である。

〔用例18〕は会話文中の用例で、末摘花が「世間並みでない私のようなものが」と解釈できる用例である。ここでの「似る」は、「世」が「比況」の対象となっていると考えられる。

〔用例19〕も会話文中の用例で、「入道がまた俗人でいらつしやつたところでさえ、普通の人と違った気性でしたから」と解釈できる。ここでは「人」が「似る」の対象となつ

ている。

〔用例20〕は、源氏の発言に対しての柏木の心中に対する語り手の評で、「いたたまれなくなつてもてあましている（柏木の）有様は、普通の人の誰しも及ばぬ風情と見えた」と解釈できる。『全集』頭注には「ひとり罪におびえる柏木の心中を、この場から孤絶した存在として突き放し、あらためて外面から彼の美質を捉えなおして語りおさめる」とあり、ここでも、有様が「普通の人」に及ばない、という「比況」の対象となつている。

〔用例21〕は、「夕霧の見た目にはつとさせられるようなつややかさが誰とも違つている」と解釈できる。ここでは、柏木は「並びなきなり」とあり、それを承けて、世間一般の人と比べようもない、とあるのである。

〔用例22〕は、会話文中の用例で、「中の君が前々から人と違つておりまして」と述べる場面である。ここでは、「に似たり」形で表れた「昔」が、「似る」に先述している点で共通し、「に似る」の承接語「人」が比況の対象となつている点はこれまでの用法と共通していると考えられる。

〔用例23〕年の暮がたには、かからぬ所だに、空のけしき例には似ぬを、荒れぬ日なく降り積む雪にうちながめつつ明かし暮らしたまふ心地、尽きせず夢のやうなり。

（五）総角329頁

〔用例24〕（略）かの人の御移り香のいと深くしみたまへるが、世の常の香（かう）の香（か）に入れたきしめたるにも似ずしるき匂ひなるを、その道の人にしおはすれば、あやし、と咎め出でたまひて、いかなりし事ぞ、と気色とりたまふに、（略）

（五）宿木423頁

〔用例25〕黄昏時のいみじく心細げなるに、雨冷やかにうちそそきて、秋はつるけしきのすごきに、うちしめり濡れたまへる匂ひどもは、世のものに似ず、艶にて、うち連れたまへるを、山がつどもは、いかが心まどひもせざらむ。

（五）総角276頁

〔用例26〕紛るることなくあらまほしき御住まひに、御前の前裁ほかのには似ず、同じき花の姿も、木草のなびきざまもことに見なされて、遣水にすめる月の影さへ絵

に描きたるやうなるに、思ひつるもしく起きおはしましけり。

(一五) 総角249頁)

「用例23」は、「空の景色は常と変わっていくものだが」と解釈できるが、「A、Bに似る」のBは、「例」であり、比況の対象は一般的なものとなっている。

「用例24」は、「世間のありふれた香をたきしめたのとも違つてその人(薫)のとははつきりわかる匂いなので」と解釈できる。「用例14」「香(か)にこそげに似たるものなかりけれ」と類似するが、敢えて相違点を示すと、ここでの「A、Bに似る」のBも「世の常」という一般性が明示されていることであろう。

「用例25」は、「薫、匂宮、お二人の風情は、世間に類もなく優艶であり」と解せるが、「A、Bに似る」のBは「世のもの」であり、これまでのように、一般性が明示されていると考えられる。

「用例26」は、「御座所の御前の前裁はよそとも違つて」と解釈できるが、「A、Bに似る」のBは、「ほかの」と

いう、やはり一般性との関係が示されていると考えられるのではないだろうか。

「用例27」これは、源氏の御族にも離れたまへりし後大殿わたりにありける悪御達の、落ちとまり残れるが問はず語りしおきたるは、紫のゆかりにも似ざめれど、(略)

(一五) 竹河53頁)

「用例28」葦垣の方を見るに、例ならず、(宿直人)「あれは誰ぞ」といふ声々いざとげなり。立ち退きて、心知りの男を入れたれば、それをさへ問ふ。さきざきのけはひにも似ず。わづらはしくて、(男)「京よりとみの御文あるなり」と言ふ。

(一六) 浮舟180頁)

「用例27」は、「生き残つた女房の話は、紫の上のゆかりの人の話にも似ていないが」と解釈できる。ここでは、「A、Bに似る」のBは、「紫のゆかり」であり、これまでの直截的な「一般性」ではないが、「悪御達」との対比で考えるならば、「紫の上ゆかり」の縁者に「悪」と

は異なった「標準的」といったものを認められないだろうか。

〔用例28〕は、地の文の用例で「これまでの様子とは大違いなのである」と解釈できる。

ここでのBは、「けはひ」であり、〔用例27〕同様、直截的な「一般性」を認めることはできないが、「さきざきのけはひ」とあり、これまでの事柄を標準とする、等と捉えた方がよいのではないかと考えられる。

このように、「り・たり」と共起しない「A、Bに似る＋否定辞」の用例においては、概して、Aは、具体的な事柄や抽象的な事柄があり、Bには「一般性」や「標準的」といった性質が認められるといった共通性がある、と考えられる。

### 三―二―二、「似る」否定辞共起用法（「似る…否定辞」）

次に、「似る」と否定辞とが、直接承接せず、否定辞が後に下接する用法（「似る…否定辞」）用法について。

〔用例29〕（略）おぼえ世に軽からず、御容貌などもいとようおはしけるを、あやしう執念き御物の怪にわづらひたまひて、この年ごろ人にも似たまはず、うつし心なきをりをり多くものしたまひて、（略）

（二三）真木柱349頁

〔用例29〕は、「髭黒の大将の北の方は、年来常人のようではいらつしやらず」と解釈でき、「似…ず」と「似る…否定辞」用法であるが、これまでの、三―二―一、「似る」否定辞共起用法（「似る＋否定辞」）と同じく、「A、Bに似る」のBに「年ごろ」とあり、一般的といった法則性が認められるが、ここでの「人」は、平常時の「北の方」自身と解すれば、具体的な人物を指すことになる。

〔用例30〕（略）容貌（かたち）のよさは、この立ち去らぬ蔵人少将、なつかしく心恥づかしげになまめいたる方は、この四位侍従の御ありさまに似る人ぞなかりける。

（二五）竹河58頁

〔用例31〕（略）（源氏）「略」さらに、ここから見れど、

御ありさまに似たる人はなかりけり。いと気色こそもの  
したまへ」と、ほほ笑みて聞こえたまふ。

(四) 若菜下202頁

〔用例30〕は、「御ありさまに似る人ぞなかりける」、〔用  
例31〕は、「御ありさまに似たる人はなかりけり」で、  
共に「似る」の上接語が「御ありさま」と同一であるが、  
この用例では「一般性」や「標準的」であるというより  
も、具体的な事柄、ここでは特定の人物を指していると  
考えられるのではないだろうか(注3)。

〔用例31〕は、源氏の会話文中に表れた「に似たり」の  
否定の用例で、「あなたのお人柄のような方は全くおり  
ませんでした」と解釈でき、ここでは副詞「さらに」と  
「なかり」が呼応関係にあること等からも、「に似たり」  
形の否定として捉えるべきであると考えられる。前出  
〔用例12〕「なほ見たてまつりし人に似たるはなかりけり、  
と思ひありく。」も、「似たる」のBは、「見たてまつり  
し人」と具体的な人を指しているのである。

ところで、直接承接せず、否定辞が後に下接する用法  
(「似る・否定辞」)の特徴の一つに、「似る」と否定辞  
との間に形式名詞「もの」等の介在する用例が存するこ  
とがある。

〔用例32〕いと若うをかしげなる声の、なべての人とは  
聞こえぬ、(女)「朧月夜に似るものぞなき」と、うち誦  
じて、こなたさまには来るものか。いとうれしくて、ふ  
と袖をとらへたまふ。

(一) 花宴426頁

〔用例33〕はなやかにさし出でたる夕月夜に、うちふる  
まひたまへるさま、にほひ似るものなくめでたし。

(二) 賢木79頁

〔用例34〕(略)限りもなくらうたげにをかしげなる御さ  
まにて、いとかりそめに世を思ひたまへる気色、似るも  
のなく心苦しく、すずろにもの悲し。

(四) 御法490頁

〔用例32〕は、森脇(二〇〇四)にも示した如く、『全集』

頭注に「照りもせず曇りもはてぬ春の夜の朧月夜にし、くものぞなき」（大江千里集、新古今・春上 大江千里）による。「しく」は漢文訓読語なので、女にふさわしく「似る」と言いかえたとも、当時すでに「似る」と伝承されていたともいわれる。この歌によって、この女を朧月夜と称する。」と指摘する記述があるように、「似る（もの）否定」形と、「しく」とを相対的に捉えることを可能にする用法である。

〔用例33〕は、「源氏の立ち居、振る舞われるお姿、そのつやつやした美しさは似るものなく立派である」と解釈できる。ここでは「A、Bに似る」のBは明示されないが、これまでの用例と同じく「よのもの」等が想定されよう。

〔用例34〕も「似るものなく」の用例で、「紫の上はこの世が全く仮の宿りとおもっていらつしやるその御面持ちが、二つと比べるもののないほど痛々しく訳もなくもの悲しく感ぜられる」と解釈できる。

〔用例35〕きよげなる大人二人ばかり、さては童べぞ出で入り遊ぶ。中に、十ばかりにやあらむと見えて、白き

衣、山吹などの萎えたる着て、走り来たる女子、あまた見えつる子どもに似るべうもあらず、いみじく生ひ先見えてうつくしげなる容貌なり。

（一）若紫280頁

〔用例36〕（略）立ちて、のどかに、袖かへすところを、一をれ気色ばかり舞ひたまへるに、似るべきものなく見ゆ。左大臣、うらめしさも忘れて、涙落したまふ。

（一）花宴424頁

〔用例37〕世の人のありさまを見聞くに、劣りまさり、賤しうあてなる品に従ひて、容貌も心もあるべきものなりけり。わが子どもを見るに、この君に似るべきやはある。

（六）東屋75頁

〔用例35〕は、「走ってきた女の子（紫の上）は、大勢姿を見せていた子供達とは比べものにならない」と解釈できるが、この場合「A、Bに似る」のBは「あまた見えつる子ども」と具体的な人を指しており、比況の対象として捉えられる。

「用例36」は、「源氏の舞がたえようもなくみごとにみえる」と解釈できる。ここでは「似る」否定語「なし」に「べき」、名詞「もの」が介在し、「用例35」同様に、比況の用法と捉えられる。

「用例37」は、「常陸介との間に設けた我が子と八の宮の娘である浮舟に比べられるものがあるだろうか」と解釈できるが、この場合「A、Bに似る」のBは「この君」と具体的な人を指しており、やはり比況の対象として捉えられる。

このように、「似る」の用法中、直接承接せず、否定辞が後に下接する用法（「似る…否定辞」）には、所謂比況の用法があり、漢文訓読語「シク」との共通性があると考えられる。

#### 四、おわりに

以上、『源氏物語』に表れた「似る」の用法を考察し、次のような結論を得た。

・「にぞ」「には」「にも」「にこそ」「いとよく」「げに」等、「に」と「似る」との間に介在し、「似る」は本動詞用法として捉えられる。

・否定辞と共起しない「似る」肯定形は、「り・たり」と共起する。例外は「似て」形であるが、極めて少数である。

・「り・たり」と共起しない「A、Bに似る＋否定辞」の用例においては、概して、Aは、具体的な事柄や抽象的な事柄があり、Bには「一般性」や「標準的」といった性質が認められる。

・否定辞と共起する「似る」否定形は、形式名詞「もの」や「べし」が介在する用法があり、この用法は漢文訓読語「シク」と共通性がある

「似る」と他の語形との関係、具体的には、現代語で「ている」形と共に共起し、しかも「似る」（百三十二例）とほぼ同数の用例数である動詞「すぎる」（百二十五例）の用法との比較、対照については別稿を準備しているので、改めて論じたいと思う。



ご教授賜れば、幸いである。

(注)

(注1) 森脇茂秀(二〇〇四)参照のこと。現代語の「似る」の用法については、森田良行(一九八九)、鈴木英夫(二〇〇一)に詳しい考察がある。

(注2) 「似て・・・つ」形は、この用例だけである。「似る」と「つ」との関係については、ここでは保留する。

(注3) 近藤明(一九八四)には、「(略)動詞が「似る」である場合は、「動詞・・否定辞」は(略)「もの」のように抽象的な名詞を仲介することが多いのに対して「動詞+り・たり・・否定辞」は(略)「人」や「帯」「所」のように具体的な名詞を仲介することが多いようである。」との指摘がある。

(参考文献)

・近藤明(一九八四)「助動詞「り」「たり」の活用形の偏在をめぐって」(『国語学研究』24)

・近藤明(二〇〇三)「助動詞「り・たり」に否定辞が下接する場合」(『国語学研究』42)

・森田良行(一九八九)『基礎日本語辞典』(角川書店)

・鈴木英夫(二〇〇一)「格助詞と動詞―「く」に似る」と「く」と似る」を中心に―」(『日本語学』20-3)

・工藤真由美(一九九五)『アスペクト・テンス体系とテクスト―現代日本語の時間の表現―』(ひつじ書房)

・森脇茂秀(二〇〇四)「動詞「似る」の意味用法について―平安初・中期の仮名文を中心に―」(『別府大学国語国文学』46)

・森脇茂秀(二〇〇六)「中古仮名文における漢文訓読語「ごとし」の意味用法について」(『語文研究』100・101)